

Title	Factors affecting independence in eating among elderly with Alzheimer ' s disease
Author(s)	枝広, あや子
Journal	歯科学報, 112(2): 240-241
URL	http://hdl.handle.net/10130/2789
Right	

氏名(本籍)	えだ ひろ あや子 (東京都)
学位の種類	博士(歯学)
学位記番号	第1879号(乙第745号)
学位授与の日付	平成23年3月9日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	Factors affecting independence in eating among elderly with Alzheimer's disease
掲載雑誌名	Geriatrics & Gerontology International, DOI 10.1111/j.1447-0594.2011.00799.x
論文審査委員	(主査) 山根 源之教授 (副査) 櫻井 薫教授 井出 吉信教授 松久保 隆教授

論文内容の要旨

1. 研究目的

認知症高齢者では、食事の自立が低下することにより、食事量の減少、低栄養、脱水および免疫機能の低下、さらなる認知機能の低下や、肺炎および余命短縮リスクの上昇が起こることが知られている。食事に関連した行動障害は認知症の中核症状そのものや、それに起因するBPSD(Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia)と解釈されるが、認知症高齢者の摂食・嚥下機能や食事に関連した行動障害に関する検討が少なく対応も確立していないことから、ケア提供者にとって大きな問題の一つとなっている。そこで本研究は、認知症高齢者の多数を占めるアルツハイマー型認知症(AD)を対象に、食事に関する行動障害の実態把握と認知症重症度別の比較を含め、特に食事の自立低下に注目しその背景因子を検討することを目的とした。

2. 研究方法

対象者は、認知症病棟入院中の認知症高齢者、施設入所の認知症高齢者およびグループホーム入所中の認知症高齢者でADの診断がされていて経口摂取している150人とした。対象者に対し食行動調査と認知機能検査、神経学的検査、生活機能調査を行い、詳細な検討を行った。食行動調査は食事開始から終了までを観察し、対象者の摂食回数や摂食以外の行動、機能障害等を調査した。統計学的検討はSPSSを用いANOVA with Bonferroni post-hoc test, Spearman's correlation analysis, χ^2 test, Student's t-test, Logistic regression analysisで検討した。

3. 研究成績および考察

食事の自立は、認知症が重度の者ほど有意に低下し、特に中等度から重度にかけて有意な低下が認められた。「リンシング・ガーグリング困難」「嚥下障害の徴候」は、重度ADでも半数程度の出現頻度であり、重度ADで「嚥下障害の徴候」は食事の自立に対し有意に負の影響を与えていた。食事関連BPSDと食事の自立との関係については、「食事開始困難」が中等度・重度ADの両方で食事の自立に対し有意に負の影響を与えていた。「食具の適正な使用が困難」「適量のすくい取りが困難」「食事の注意維持困難」は重度ADでのみ、また「食事時の覚醒維持困難」は中等度ADで、食事の自立に対し有意に負の影響を与えていた。

食事の自立低下の背景因子の検討をLogistic regression analysisを用いて行ったところ、ADでは「食事開始困難」(OR=14.498, $p=0.007$)「嚥下障害の徴候」(OR=5.214, $p=0.046$)「認知症重症度」(OR=

4. 538, $p = 0.030$)が強く関わっていた。

4. 結 論

軽度ADでは、食事に関連した行動障害の出現頻度は低かった。これはADが軽度認知症では運動障害が軽度であり、手続き記憶が保持されていることもその一要因と考えられた。特に重度ADで顕著にみられる食事開始困難や食具の使用法の混乱は、注意障害、見当識障害、失行、実行機能障害に関連し、“食事開始の手がかりの喪失”が自立の妨げになるものと考えられた。

今回の調査でADの食事の自立を妨げる要因としての「食事開始困難」の存在を、初めて客観的数値で提示し得た。ADの食事の自立を支援する方法の一つとして、「認知症重症度」「嚥下障害の徴候」に加え「食事開始困難」に注目した食事支援が効果的である可能性が示唆された。今後、ADの摂食・嚥下障害への対応の一つとして、食事開始を障害する因子を除き、開始を促す具体的な支援の有効性を検討する必要がある。

論 文 審 査 の 要 旨

高齢社会に伴って増加する認知症高齢者への対応は、大きな社会的問題であり、その対策は国家的急務である。認知症高齢者では、種々の行動障害によって食事の自立が低下することにより、食事量の減少、低栄養、脱水および免疫機能の低下、さらなる認知機能の低下や、肺炎および余命短縮リスクの上昇が起こることが知られている。しかし食事に関連した行動障害に関する検討は少なく対応も確立しておらず、摂食・嚥下障害への対応はケア現場で大きな問題の一つとなっている。そこで認知症高齢者の多数を占めるアルツハイマー型認知症(AD)を対象に、食事に関する行動障害の実態把握と比較に着目し、特に食事の自立低下に注目しその背景因子の検討を行った。

その結果、ADの食事の自立の障害に対し「食事開始困難」「嚥下障害の徴候」「認知症重症度」が強く関わっていることが明らかとなり、ADの食事自立支援において「食事開始困難」に注目した食事支援が効果的である可能性が示唆された。本論文はADの食事自立を妨げる要因として「食事開始困難」の存在を客観的数値で提示した初めての報告である。

本審査委員会では、1)対象とする認知症高齢者の原因疾患について、2)食事の自立の評価検討方法、認知症重症度別の3群比較の検討方法の妥当性について、3)今後の臨床応用の可能性などについての質疑がなされたが、概ね妥当な回答が得られた。また、本研究は当初、脳血管障害型認知症とADの比較を行っていたが、原因疾患をADに絞ること、論文中の用語や表現方法、表の表記について修正すべき点が指摘され、訂正が行われた。

本研究で得られた結果は、今後の歯科医学の進歩、発展に寄与するところ大であり、学位授与に値するものと判定した。